

日本の聖書

【日本の聖書①】カトリックとプロテスタントで共通の聖書を採用しているのは世界で日本だけ？

はじめに

世界には多くの国があり、多くのキリスト教徒が聖書を読んでいます。

しかし驚くべきことに、カトリックとプロテスタントが翻訳の段階から共同で参加し、同じ訳文を共用している国は、世界でほぼ日本だけです。

歴史的に見ても、聖書の扱いは教派の違いを象徴してきました。

翻訳の方向性、本文の構成、第二正典（カトリックではこれを正典に含め、プロテスタントでは外典として扱うのが一般的）を含めるかどうか etc…教派ごとに姿勢が異なるからです。

ところが、日本では、新共同訳（1987年）→聖書協会共同訳（2018年）という流れにより、カトリックとプロテスタントが「同じ翻訳聖書」を共用しています。

この現象は、日本のキリスト教界が世界でも特異な存在であることを物語っています。

世界のキリスト教は聖書がそれぞれ

多くの国では教派で聖書が分かれています。たとえば英語圏では、カトリックは NAB（新アメリカ聖書）や Jerusalem Bible、プロテスタントは NIV や ESV、さらに英国国教会は NRSV と、それぞれ別の翻訳聖書を使用しています。

同じ英語でありながら、共用の「公式訳」は存在していません。特に、カトリックは「第二正典」を含めるため、本文構成が異なります。

一方、プロテスタントは、それを正典として認めない教派が多く、そもそも聖書の冊数が違うのです。

つまり、「同じ翻訳」を使うためには、正典認識から一致しなければならないのです。これは、簡単なことではありません。

日本は「翻訳段階で協力」している点が異常に珍しい

日本の新共同訳と聖書協会共同訳は、翻訳委員会にカトリックとプロテスタント双方が参加し、同じ本文を使うことを前提に作られました。

カトリック版には第二正典が付録として収録されますが、本文の翻訳そのものは完全に共通しており、学校、教会、出版物で全国的に広く共用されています。

世界でも、本文が同じ翻訳聖書を使っている国は、実質的に日本だけです。

なぜ日本だけ共用できたのか？

理由は、とても現実的です。

- ① キリスト教徒の人口が少ないこと 教派が別々に聖書を用意しては宣教にも教育にも非効率。
- ② 多くの教派が同じ環境に共存していたこと 学校教育、神学教育、出版などで共用が進みやすかった。
- ③ 日本聖書協会の存在が大きかったこと 調整役となって共同翻訳を主導した。

「一致しないと双方が発展できない」という環境が、日本では整っていたのです。

結論：日本の「共通聖書」は世界的にも珍しい成功例

世界では、教派ごとに聖書が違うのが普通です。しかし日本では、教派を超えた共通翻訳が成立しています。

翻訳段階から協力し、本文を共用している例は、日本がほぼ唯一です。

日本の聖書翻訳は、世界が注目するエキュメニカル（教派一致）の象徴となっています。

【日本の聖書②】日本のキリスト教界で共通の翻訳聖書を採用するに至った経緯

はじめに

日本で現在広く使われている新共同訳聖書（1987年）と聖書協会共同訳（2018年）。

これらは、カトリックとプロテスタントが協力して翻訳した「共通聖書」です。

しかし、最初から一致していたわけではありません。日本でも、戦前～戦後にかけては教派ごとに別々の聖書を使用していました。

ここから、どのように共通の聖書へと進んでいったのでしょうか。

戦前：カトリックとプロテスタントの聖書は完全に別物だった

プロテスタントは文語訳（明治訳）、カトリックはヴルガタ（ラテン語）を元に独自翻訳した聖書を使っていました。

基本的に交流も協力もなく、聖書は「教派のアイデンティティ」の象徴でした。

1955年：プロテスタント中心「口語訳」の登場

戦後、日本語が大きく変化したことで、若い人にも読める現代語の聖書をという要望が高まりました。この結果生まれたのが口語訳聖書（1955年）です。

大変読みやすく、多くの教会で採用されましたが、カトリックは不参加でした。

口語訳は当初から外典（第二正典）を翻訳対象に含めておらず、したがってカトリックが典礼・教育に用いる聖書としては採用できませんでした。

つまり、口語訳は画期的ではありましたが、教派一致にはつながらなかった、という点が重要です。

1962～65年：第二バチカン公会議がカトリックの姿勢を変えた

ここが歴史的な分岐点です。

「他教派と共同で聖書を翻訳してよい」「原語（ヘブライ語・ギリシャ語）から翻訳してよい」

これは、カトリックの長い歴史を根底から変える決定でした。これにより、教派一致の翻訳が可能となったのです。

1967年：日本で共同翻訳プロジェクト開始

日本聖書協会とカトリック中央協議会が合意し、共同翻訳委員会（JTC）が発足しました。

翻訳者には、カトリックの神父・修道者、プロテスタントの牧師・聖書学者が入り、対等な立場で議論が行われました。

この委員会（JTC）は、翻訳作業そのものを共同で行うという点で画期的でした。

一方の教派が翻訳したものを他方が承認する、という方式ではなく、当初から双方が同じテーブルで議論し、一つの訳文を作り上げる体制を取ったのです。

1987年：新共同訳が完成し、「共通聖書」が誕生

約20年の協力の成果が新共同訳聖書です。訳文は教派共通で、カトリック版には第二正典を付録として収録（本文は同じ）しました。

日本のキリスト教史で初めて、同じ聖書が共用され、教育現場、教会、書籍などで広く普及し、事実上の標準聖書となりました。

現在では聖書協会共同訳（2018年）への移行が進んでいますが、多くの教会ではいまでも新共同訳が日常的に使用されており、その普及と定着は現代に至るまで続いています。

2018年：聖書協会共同訳へ（共同路線継続）

新共同訳から31年、さらに原文の正確さを追求した新しい共同翻訳聖書が刊行されます。

カトリックとプロテスタントが再び共同参加し、日本語としての自然さと正確さを追求しました。日本の共同翻訳体制は今も続いています。

このように、日本における聖書の一致は自然に起こったのではなく、努力の積み重ねで実現されたものです。

日本は、教派の壁を超えて「共通聖書」を作り上げた、世界でも稀な国なのです。

【日本の聖書③】共同翻訳で生まれた論争点とは何か―「ヨハネ 1:1」はなぜ議論になったのか

はじめに

日本における聖書翻訳には、世界でも珍しい特徴があります。それはカトリックとプロテスタントが共同で翻訳した聖書が存在するという点です。

1987年刊行の新共同訳聖書、そして2018年の聖書協会共同訳がその代表です。

しかし、教派が違うということは、教義も解釈も異なるということです。

そのため、翻訳作業の過程では、「どの訳語を採用するのか」「原文をどう理解するのか」を巡り、さまざまな論争が生まれました。

本記事では、その中心的な論争テーマを取り上げ、特にヨハネ福音書1章1節の訳を例に、共同翻訳の裏にある神学的な緊張と対話の歴史を見ていきます。

最大の論争点：ヨハネ福音書1章1節の訳

共同翻訳最大の論争は、聖書の冒頭とも言えるこの一節でした。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」（口語訳・新共同訳共通）

一見、どこに問題があるのか分からないかもしれませんが、原文のギリシャ語には重要な点があります。

原文では、述語にあたる「神 (theos)」に冠詞がついていません。一方、主語の「言 (ho logos)」には定冠詞「ho」が付いています。

kai theos ēn ho logos

（そして神であった、その言は）

この非対称性から、「言は神と同一の神ではなく、神的な存在である」と解釈する余地が生まれます。ここで教派の立場の違いが表面化しました。

カトリック →原文のニュアンスを正確に、哲学的含みを残したい

プロテスタント（特に福音派） →キリストの神性（神であること）を明確にしたい

つまり、「言（ロゴス）は神なのか、それとも神的存在なのか」、ここで意見が対立したのです。

最終的に、日本語訳としては「言は神であった」が採用されました。

これはプロテスタントの主張に近い形です。しかし、ただの勝利ではありません。

カトリックの側は、「神と等しい、と断定しすぎないための注解」を求め、翻訳ノートにおいてニュアンスを説明することで折り合いをつけました。

訳文を変えるのではなく、注解で神学的バランスを取ったのです。

この一節がどれほど重要かという点、キリスト教における「イエスは完全な神であり、完全な人である」という理解の根拠となる部分だからです。

共同翻訳は、単なる日本語の問題ではなく、キリスト論（Christology）の根幹に触れる神学問題を扱っていたと言えます。

「おとめ」か「処女」か—イザヤ書 7章 14節

次の論争は、イザヤ書の預言です。

「それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる。」（口語訳）

「それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産みその名をインマヌエルと呼ぶ。」（新共同訳）

ヘブライ語の原文には「**אִלְמָנָה**（アルマー）」という単語が使われています。

意味としては「若い女性」「娘」であり、必ずしも「処女」を意味する言葉ではありません。ここで教派の意見が分かれます。

カトリック →原文の語義を尊重しつつ、教義は否定しない形にするべき

プロテスタント（特に福音派） →新約（マタイ 1章）との整合性から、処女懐胎を強調するべき

結果、共同訳では「おとめ」が採用されました。

「処女」と断定せず、かつ「若い女性」と曖昧にもしない。これは、原文の幅を残しつつ、神学的要請も満たす表現と言えます。

なお、口語訳では「その名はインマヌエルとなえられる」（受動形）ですが、新共同訳では「その名をインマヌエルと呼ぶ」と能動形に改められており、主体の明確化という翻訳方針の変化も見られます。

「兄弟」という言葉をどう訳すか

福音書では、イエスの「兄弟」が登場します。しかし、カトリックには「マリヤの終生童貞（永遠に処女であった）」という教義があります。

したがって、聖書に「兄弟」と書かれている場合に、実の兄弟と訳すべきかどうか議論になりました。

カトリック →兄弟=いとこ・親族・弟子などの広い概念

プロテスタント →兄弟=文字通りの兄弟と読める

共同訳では、「兄弟たち」と訳しつつ、注解に「親族・仲間を含む」と記載されることで合意しました。

「義」「救い」「恵み」などの訳語選択

この問題は、単語そのものに神学が含まれているため、議論が避けられませんでした。

例：ローマ人への手紙 3 章 24 節

「彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。」（口語訳）

「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」（新共同訳）

カトリック →義を内的変化・成聖と理解

プロテスタント（特に福音派） →義を法的宣言（無罪宣告）として理解

両方を包含するため、「義とされ」という表現が採用されました。

これは、双方の神学を損なわない、中立的な表現の探求と言えます。

神の名「YHWH（ヤハウエ）」をどう扱うか

旧約聖書には「YHWH」という固有名が現れます。しかし、ユダヤ教では、この名を口にしてはならないとされます。

カトリック →「ヤハウエ」の発音を避けたい

プロテスタント →固有名なので原語に近い表記をしたい

新共同訳・聖書協会共同訳では、YHWHを一貫して「主」と表記しています。

ただし、2008年にカトリック教会は典礼文中での「ヤハウエ」使用を公式に禁じており、これが共同訳における「主」統一の方向性とも一致しています。

プロテスタント内には、固有名の抹消に違和感を覚える神学者もいますが、共同訳においては教義的配慮が優先されました。

結論—共同訳は神学の妥協ではなく「対話の成果」

共同訳は、「日本語として読みやすい聖書を作るための作業」ではなかったのです。

それは、教派と神学が衝突しながらも、一致点を探し続けるプロセスでした。

翻訳作業では、一つの言葉を巡って何週間も議論し、「どの日本語訳なら双方の信仰告白を損なわないか」を追求し続けたと記録に残っています。

共同訳は、カトリックとプロテスタントが、信仰を守りながら共通の聖書を作り上げた、神の導きによる恩恵の賜物と言えるでしょう。

最後に

共同翻訳には、議論と緊張、そして忍耐がありました。しかし、その対話があったからこそ、いまの日本では、信徒も教会も同じ日本語の聖書を読むことができます。

聖書翻訳は、言葉に神学を込める行為であり、共同翻訳は、異なる信仰が出会い、理解し合うプロセスでもありました。

それこそ、日本の聖書翻訳の歴史が持つ、もっとも美しい側面であり、すべての宗教が和合する道を示してくれるものでした。